

南大阪平和人権連帯会議沖縄現地学習会に参加して

# 辺野古新基地建設阻止！ 沖縄闘争に連帯しよう！

# 港合同



那覇空港に到着

今回この南大阪平和人権連帯会議の沖縄現地学習会に初めて参加させて頂きました。平和学習自体は初めてではありませんが、前は一回は一九九六年でしたので、その間情勢も変化しています。

全国金属機械労働組合 港合同  
大阪市港区南市岡3 6 26  
TEL 06 6583 4858  
FAX 06 6583 4600

また今回はお二人交代で全日程同行して下さい。た平和ガイドの本村さんご夫妻をはじめ、辺野古テント村の田中さん、反戦地主の真栄城玄徳さん、金城実さん、知花昌一さんと様々な方のお話を聞きしてより深い学習をすることができました。美しい辺野古の海で今まさに工事が強行されている様子、畑仕事をしている人たちのすぐ隣に巨大な基地が広がっているという光景、真っ暗なガマの中の張りつめた空気

……。現地に身を運んで触れることの大きさを感しました。

日頃からそれなりに沖縄のことに関心を持ち学んでいくつもりであつても、いざ訪れてみると自分自身の無知、またいわゆる「本土」社会の意識の低さを思い知らされる場面が多々ありました。

前半は主に基地のことを学びました。平和ガイドの本村文代さんは、政府が「普天間基地返還」「辺野古への基地移設」と表現していることの問題を指摘され、なぜ私たちは「辺野古新基地建設」と言っているのかということを繰り返し丁寧に説

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！



工事強行の現実に改めて“怒”

明してくださいました。  
 辺野古浜のテント村には訪問した六月二日です。「命を守る会」の闘い二六三九日に引き続き、テント村座り込みがこの日で四七九三日になることを示す看板がありました。キャンプ・シュワブと



辺野古の浜のフェンス前にて

の間のフェンスにはたくさんさんのバナーや、リボンを入れて作ったメッセーが、この間撤去されたバナーは二〇〇〇枚にのぼるとのことです。テント村で説明下さった田中さんは、「工事は強行されているが、我々は決してあきらめず闘いによって工事を遅らせてきた。それに対して国は、いかにも順調に工事が進んでいるかのように国民を騙している」と話されました。

沖繩の人々の決してあきらめない闘い、これについても知らないことがいろいろありました。読谷村長であった山内徳信さんが、米兵の家族と村民とのスポーツ交流から始めて米軍基地返還アクションプログラムを進められ、基地の中に役場を移す（来庁する村民のタクシー代を村が補助していたそうです）ところからその地の返還にうなげたということ聞き、その大胆かつしなやかな運動の力強さに感銘を受けました。後半は沖縄戦について学習しました。

チリガマとシムクガマという二つのガマをご案内頂きました。強制集団死（いわゆる「集団自決」）を強いられた八五名が亡くなったチビチリガマと、そこから約一kmしか離れていない場所にある、ハワイ移民帰りの二人の男性の説得により全員が生き延びたというシムクガマ。チビチリガマでも生き残った人はあったが、家族全員が命を奪われた家も多くある中で、生存者の苦しみもまた大きなものでガマのことも触れることができず、ガマの調査や保存が始められたのは一九八三年だったと

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！

いうことです。

「本土」では八月十五日は「終戦の日」と呼ばれています。しかし沖縄では、牛島満中将の自殺により組織的戦闘が六月二十三日に終結した後も司令部の壊滅を知らされず、また牛島の「最後の兵まで戦え」という命令ゆえに戦闘は降伏文書への調印がなされる九月七日まで続き、十一月までガマの中に隠れていた人もいたとのことでした。

平和ガイドの本村みつおさんが言われていたこと



金城実さんのアトリエ訪問

とが心に残っています。「皆さんはここに来て沖縄を見るのではない、日本を見るのです」と。このような沖縄の現状を支えているのは誰なのかと、優しい言葉ながら厳しく問いかけられました。

「本土防衛の捨て石」とされた沖縄での地上戦における筆舌に尽くしがたい被害。そして米軍基地のほとんどは日本軍の



交流を深めた夜の懇親会

拠点の跡につくられており、「日本を防衛する」という大義名分のもと、基地被害が沖縄に押し付けられ続けています。

私は日頃介護の仕事に携わっていますが、私たちの納めた税金の使途の大部分を占めているのは人の命や暮らしを守る福祉や医療ではなく逆にそれらを脅かす基地や軍備なのです。

そして安倍政権は秘密保護法、戦争法に続いて共謀罪をも強行採決し、さらに改憲の動きを強め戦争への道を突き進んでいます。

また知花さんが、チビチリガマとシムクガマの対比から教育が及ぼす影響の大きさについて話しておられました。現在の歴史教育の在り方、森友学園・加計学園問題はまさにそこに通じています。

沖縄を通して見えた日本の現在にしっかりと向き合い考え行動していかねばならないと感じました。

南労会支部 H

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！